

# 県内の動物病院でSFTSウイルス感染を疑う伴侶動物を調査して分かったこと

長崎県環境保健研究センター

○吉川亮、井原基<sup>※</sup>、大串ひかる、浦川春香  
中峯文香、三浦佳奈、高木由美香

(<sup>※</sup>: 現、長崎大学熱帯医学研究所)

## 1 はじめに

長崎県では、第1表のとおり2022年から2024年にかけて毎年13名のSFTS（重症熱性血小板減少症候群）患者が報告され、2025年も7月3日時点で7名の患者報告<sup>1)</sup>があり、全国でも有数の患者報告数となっている。また、国立感染症研究所の調査<sup>2)</sup>では、本県のSFTSに感染した猫の数は全国で最も多いと報告されている。このことから本県では医療、獣医療の両分野において公衆衛生上の喫緊の課題となっている。

そこで、当センターでは、長崎大学熱帯医学研究所ウイルス学分野（以下、熱研ウイルス）、長崎大学環境科学部および公益社団法人長崎県獣医師会（以下、県獣医師会）の協力のもと、「本県のSFTS患者発生予防に向けた感染源・感染経路に関する研究」と題し、患者情報の疫学解析、植生マダニの調査、伴侶動物の調査およびヒトや伴侶動物等から検出されたSFTSウイルスの分子疫学解析等を行い、得られた情報や成果を感染対策に資するよう行政や医療機関をはじめ県民にも広く提供を行う調査研究を開始した。

今回、県獣医師会ならびに小動物臨床獣医師の先生方の協力のもと当センターで実施したSFTSウイ

ルス感染を疑う伴侶動物の感染状況を調査した結果とともに調査の過程から分かってきた本県の実情について報告する。

## 2 調査方法

県獣医師会ならびに小動物臨床獣医師の協力のもと、2023年6月から2025年6月までに動物病院にてSFTSウイルス感染を疑う伴侶動物125頭（猫112頭、犬13頭）を対象に提出された検体（血液、場合によって口腔拭い液、結膜拭い液、肛門拭い液など）から市販の抽出キットを用いRNAを抽出し、熱研ウイルスから提供されたリアルタイムPCRの系によりSFTSウイルス遺伝子の検出を試みた。

また、上記検査でSFTSウイルス遺伝子を検出した場合、速やかに検査を依頼した小動物臨床獣医師へ報告し、獣医療スタッフおよび飼い主への注意喚起を依頼した。依頼した主な内容としては、感染した伴侶動物に対する基本的な感染対策と飼い主等が体調を崩した際の医療機関への受診であった。

## 3 調査結果

SFTSウイルス感染を疑う猫112頭中51頭（45.5%）、SFTSウイルス感染を疑う犬13頭中2頭（15.4%）か

第1表 長崎県のSFTS患者報告数の推移

西暦	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
SFTS患者報告数	2	2	2	11	4	8	6	6	13	13	13	7*

\*：2025年は7月3日時点までの暫定値

第2表 伴侶動物のSFTSウイルス遺伝子検出状況

動物種	調査頭数	陽性頭数	飼養形態	調査頭数	陽性頭数
猫	112	51	飼い猫	97	46
			その他	15	5
犬	13	2	飼い犬	12	2
			その他	1	0

らSFTSウイルスを検出した（第2表）。今回の調査でSFTSウイルス感染を疑う猫から高い確率でSFTSウイルスの感染を確認できた理由として、本県の小動物臨床獣医師の先生方は、熱研ウイルスの調査研究に長年協力しており、SFTSの臨床診断技術が高いことが示唆された。

本県の小動物臨床獣医師の実情を考慮すると、体調を崩した伴侶動物を動物病院に受診することを勧奨し、SFTSの検査体制を維持することにより飼い主等の感染対策につながる事が期待される。

また、調査した伴侶動物は、飼い猫（112頭中97頭：86.6%）や飼い犬（13頭中12頭：92.3%）が大半を占めており、SFTSウイルス遺伝子検出は飼い猫97頭中46頭（47.4%）、飼い犬12頭中2頭（16.7%）であった。飼い猫や飼い犬といった伴侶動物から多数のSFTS感染を認めたことから県民の身近な生活圏にSFTSに感染したマダニが存在することを強く示唆するものであった。このことは、ここ数年報告された患者に畑や庭仕事などの疫学情報が多く含まれることと合致する。

本県における人や伴侶動物のSFTS感染状況、特にSFTS患者に対してSFTS感染猫の数がはるかに多いことから、動物病院の協力のもとSFTSウイルス感染疑いの猫を調査することにより、地域や時期など人へのSFTSウイルス感染リスクを探知できる可能性が示唆された。これまでの調査において、猫のSFTSウイルス感染の確認から一過性のホットスポットの事例やSFTS感染猫から感染したことが強く疑われる事例などを経験し、伴侶動物の調査の有用性を実感している。

#### 4 まとめ

今回の調査から県獣医師会や小動物臨床獣医師の協力のもとSFTSの検査体制を構築することにより本県のSFTS患者対策につながる事が考えられた。また、身近な生活圏にSFTS感染マダニが存在することを想定した場合、伴侶動物の調査は、SFTSウイルス感染リスクを知るSFTSサーベイランスとして有用であることが示された。

#### 5 参考文献等

- 1) 長崎県感染症情報センター、重症熱性血小板減少症候群（SFTS）、<https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/hukushi-hoken/kansensho/kansen-c/sfts-kansen-c/668494.html>（2025.7.4アクセス）
- 2) 国立感染症研究所、獣医療関係者の SFTS 発症動物対策について（2025 年バージョン）  
[https://www.niid.jihs.go.jp/content2/research\\_department/vet/animal-borne-2\\_2025-06-10.pdf](https://www.niid.jihs.go.jp/content2/research_department/vet/animal-borne-2_2025-06-10.pdf)（2025.7.4アクセス）